



TITLE:

珍しい隕石落下の新例

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 珍しい隕石落下の新例. 天界 1928, 8(84): 116-117

ISSUE DATE:

1928-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161252>

RIGHT:

珍しい隕石落下の新例

山 本 一 清

去る一月12日、自分は茨城縣稻敷郡阿波村小學校長柳町精一氏から一通の手紙を受け、其の封筒内には、綿で包んだ一個の隕石小片が認められた、手紙を読んで見るに、

「(前略) 同封の隕石の破片は、昭和2年四月28日午前9時頃、本村大字須賀津、栗山太平方へ落下せしものにて、同人の第二女(5歳)が軒端さきにて遊び居りし處、突然悲鳴を擧げしを以て、母が驚きて馳けつくれば、右頭部ニケ所に裂傷を生じ、同封の破片が襟に留まり居りしものに之れ有り、之れを手にしたる時は熱さを感じたりと申すここに之れ有り候。女兒は其の後、發熱せしも數日にして創は療えたりとのこゝ。不思議なることなりとて小生の手許まで持參せしものに之れ有り候。(後略)」

自分は此の文を読んで非常な珍らしさを感じ、早速、大學天文臺内の同僚にも見せた。およそ隕石や隕鐵が、日々幾千萬もなく天から落下し来る流星と同類の天體であることは皆人の知る所であり、空中を飛んでゐるうちに消滅せず、固體のまゝ地上に達するものも數多いことである。我が日本に於いても今日諸所に保存せられてゐる此の種のものは100個にも近く、全世界の記録に於いては恐らく千個にも及ぶだらう。こんな多數の落下があるのであるから、『吾々の頭上に落ちて来るさいふ危険は無いものでせうか?』とは、よく人から聞かれる質問であるが、世界の古今東西にわたつて、此の如き例は全く無いのである。しかも此の例の無いさいふ事是不合理なことでは無いのであつて、天空の廣さ、吾人の身體の小なる事を比べ合はせるならば、日夜落下し来る多數の隕石でも、吾人の身體に衝擊するプロバビリテイは殆んど無に等しいものとなる。しかるに、こゝに珍しい中にも珍しい事件が吾が茨城縣に起つたさいふことは、こゝにかく全世界に例の無いものとして特筆するに至る可言へやう。

うち見たる所、手紙に同封された一小塊は正しく隕石の一片であつて

他にも多く同じ例がある如く、黒く焼けた表面を、飛行中に破壊された生面を示し、比重は水の3倍、自分がザツと測定した所では、

長さ 7.5 ミリ 幅 5 ミリ 厚さ 3 ミリ

のものである。重さは僅々 0.19 グラムである。獨立落下したものとては、今日學界に認められてゐる最小片の一つと考へられるものであるが、勿論之れは上記の如き小片であるから、此の落下が世間に大事件を齎さず、わづかに一幼女の軽い創ぐらゐで済んだのである。若し此の隕石が幾百乃至幾千グラムといふ程度のものであつたならば、此の衝撃を受けた人體には大なる不幸が起つたばかりで無く、或は家を焼き、一村一郡を震撼させたかも知れない。従つて、此の落下した隕石が單に學界の珍例として單にもてはやされるだけでは濟まなかつたであらう。故に、此の隕石が小片であつたことはいろいろな意味に於いて喜ばしいことであつたと言はなければならない。

柳町精一氏は茨城縣下に於いて永く學校教育に従事せられる人であつて自分は去る大正6年の夏、文部省測地學委員會の囑に依り同縣下の重力偏差を觀測してまはつた時、いろいろ親切に御世話下さつた恩人、且つ、友人である。自分は、永く御無沙汰してゐたけれど、久しぶりに此の舊友から此の珍らしい隕石を贈られて、非常に喜んだが、之れに對する御禮の手紙に添えて、尙今一二の點の調査を依頼した所、氏は快く之れを承諾され、一月20日、其の調査の結果を報告された。此の報告により

- a). 隕石に當てられた幼女は栗山ちう(大正12年十月26日生)であること。
- b). 母親は栗山てる氏で、28歳、尋常小學卒業生であること。
- c). 栗山家の家屋の構造(略す)。
- d). 落下當時、何等異常なる音響乃至雷鳴等の無かつたこと。
- e). 附近に他の破片見付からざること。
- f). 落下の翌々日(四月30日)隕石は小學校へ持參せられ、其の後柳町校長が親しく之れを保管してゐたこと。

等が判明した。

自分は之れを今回「阿波^{あは}隕石」と命名し、學界の珍品として、ひろく内外に紹介したいと思ふ。(終)